

## 成績分析からみた大学教育の研究(4)

ーアドミッションズ・オフィス方式による入学生の学業成績を中心にしてー

教養学部 大江 篤志

### 1. はじめに

大学における自己点検や自己評価の対象範囲は学生指導、就職指導、教務指導など多岐にわたっている。また点検、評価の主体も大学内部の学生や教員、内部委員会から外部機関まで多様である。しかし教育機関として大学をみた場合に、点検評価の主体がどこにあるとも、その対象から教授－学習過程を切り離して議論することには多大の疑問を抱かざるをえない。すなわち大学における教授－学習過程にいったい何がおこっているのか、またそれを規定する条件にはいかなるものがあるかなど、現実の教育場面の把握と理解を欠いて点検や評価は成り立つものではないであろう。

本研究の主要な目的は大学生の教育過程、つまり入学から卒業に至るまでの過程を成績の分析をとおして明らかにしていくことにある。もう少し具体的にいえば、学生の成績分析をとおして、学生に対する成績評価を規定している、あるいはそれに関連していると推定される条件を明らかにすることにある。その意味で本研究は大学の自己点検、自己評価のあり方、あるいはまた大学教育の理念を直接検討するわけではないが、こうした議論の前提となっている、あるいは前提となるべきはずの教育事象を対象とする点ではなにかしかならぬ関係をもつものと考えている。

ここでなぜ成績分析を行うのかについて、一言ふれておかなければなるまい。

第1に現状においては大学の教授－学習過程を総括的にとらえるための方法というのがごく限られている。例えば教授－学習過程が進行する教育場面における実際をどのようにしたらみることができらるであろうか。まず教室などでの組織的観察による方法は観察行為そのものの可能性、観察対象の一般性の確保、観察－評価組織の人員構成など、いくつかの理由からきわめて困難であろう。そこで登場するのが学生による授業評価である。これによって学生が講義や指導に対していかなる態度や認知を形成したかを把握することが可能となるであろう。しかしこの方法だけでは学生の授業評価と同一レベルで教員サイドが受講学生集団にたいしていかなる評価態度を有していたのかの把握が欠落しがちである。授業は学生－教員間に成立する一種の相互行為関係である以上、授業評価は教授者－受講者双方について行うべきものと思われる。

しかし視点を転ずれば、教員サイドは学生にたいしてほぼ伝統的に成績という形での評価を行ってきた。そしてこれがどのようになっているかの全体的把握に関する報告は必ずしも多いたとはいえない。

第2に実質的に教員サイドが責任をもって行う評価は成績をおいて他にはあまりないという現実が

ある。レポート、論文、作品、あるいは実技の達成度や熟達度も成績という形に換算されることが多い。これらはあくまでも教員からの評価であるが、そこに教員の教授側面と学生の学習側面との双方の関係を見ることができると思われる。

しかし大学における教育というものがすべて成績に集約されている、あるいは教授—学習過程の分析の全てにわたって成績評価が適切であるとは考えていないことをあらかじめ断っておかなければならない。

また成績があたかも客観的な指標であり、したがってそれによって大学間、あるいは同一大学内部の学部間の相互比較が可能であるとも思っていない。これらはそれぞれに教育的目標やその具体化ともいうべきカリキュラムを異にしているのであるから、直接比較そのものにそれほどの意味があるとは思えないのである。それは極論すれば異文化相互の直接比較のようなものであり、むしろ大学教育への歪んだイメージを与えてしまう危険さえもともなう。従って成績分析はできる限り等質的な教授—学習の場、具体的には学科、あるいは専攻を最大の輪郭として行うことになるであろう。

学生の成績といっても1学生が入学してから卒業するまでに受講する科目は相当数にのぼる。また受講する科目の性格も必修・選択、教養・選択、資格などさまざまである。従来は学業成績は手作業による記入が主であったために、これの統計処理は、不可能ではないにしても、膨大な時間と労力を必要とした。また成績そのものが学生のプライバシーに関わる個人情報であるために、取扱いには慎重に慎重を重ねるべきものであることが、成績分析のための作業を一層困難にしていた。

近年コンピュータ処理方法が導入されるようになり、処理そのものは以前にくらべるとはるかに容易になっている。しかしそれだけに個人情報の守秘に関わる問題が一層大きくなっている。本研究は関係部局との緊密な連携のもとに、これらの問題に慎重に対応してきていることを付記しておく。

## 2. 課題と方法

### (1)目的

教育機関としての大学が維持し、存続していくための必須の要件の1つが学生の確保にあることはいうまでもあるまい。学生の確保は一般に入学試験という選抜を主要な手段としているが、これは基本的になんらかの意味において「質の高い」学生の獲得を意図してなされているものであろう。しかし、より根本的には「一定程度の学生数の確保」の要請にもとづいていることもまた否定できない。つまり大学は、質の高い学生を確保したいとの要求をもちつつも、一定程度の学生数を確保しなければならない。この2つの条件が相反しなければ、すなわち質の高い多数の学生が確保できれば、少なくとも大学が自らの存続について大きな問題や危機感を抱くことはないであろう。

この2つの条件の充足そのものは個々の大学内部の問題であるかもしれない。しかしこの充足は大学が相互に関与しておこなうゲームに似た社会的性格をも有しているのもまた事実であろう。大学は

他大学との関係でのみ、より質の高い多数の学生を確保するほかはないからである。しかも18歳人口の減少過程においては大学のゲーム戦略が熾烈化しており、私立大学はもとより、現在では旧国立大学でさえも自校をアピールするために高等学校、受験生、高校生にたいして積極的に広報宣伝活動をするようになってきている。

これとともに、学生の募集や選抜の方法が多様化している。入学試験も試験科目の教科や数において様々になっている。推薦入試の内容も多岐にわたり、最近ではアドミッションズ・オフィス方式、いわゆるAO入試が多くの大学でまたたくまに採用されてきている。

選抜方法の多様化とは、大学に入学してくる学生の入学類型の多様化にほかならず、入学類型が多様化すればするほど、大学は多様な質の学生を抱えこまざるをえない。これは「質の高い」「多数の」学生の確保という命題の一つの帰結であるといつてよい。そしてこれは大学における教育の内容と水準、方法などに直接間接に関わる問題ともなろう。現在、大学入学生の学力の低下が社会問題化し、補習教育などにより対処している大学が少なくないが、そもそも選抜方法の多様化は個々の大学の教育の問題なのである。

いくつかの異なる入試類型を経由して入学した大学生を、在學生を構成する学生カテゴリーとしてとらえたとき、原則として集団教育を前提とする大学において、これらの学生カテゴリーははたして一定程度の均質性を有しているか否か、あるいはどの程度まで均質といえるかという問題に直面せざるをえない。これが本稿の基本的な課題関心である。この均質性の指標としては大学教育への準備体制と程度、学業態度、入学後の学生生活の目標、卒業後への将来展望などが考えられるが、本稿では学生が受講した科目にたいして担当教員がおこなう評価、一般にいうところの成績（以下、「学業成績」あるいは単に「成績」とする）を用いることにする。学業成績は大学での教育過程でのもっとも重要な指標となると考えるからである。ここで上述した課題関心は「入学類型によって在学中の学業成績が異なっているか否か」と操作される。本稿の目的は入学類型による学業成績の相違の有無と程度とを明らかにすることにある。

筆者はこれまでの報告において上掲の問題を取り上げてきている。まず最初に東北学院大学（以下、「本学」とする）に1996年4月に入学し、4年後の2000年3月に卒業した2,305人を分析対象として、対象者が受講のために登録した科目全体における合格科目、不合格科目、放棄科目<sup>(1)</sup>の分布を学科・専攻別に分析し<sup>(2)</sup>、次いで、同一対象者の在学中に受講した放棄科目以外の全科目の成績を学科・専攻別、入学類型別に分析した<sup>(3)</sup>。さらに1990～2001年度の卒業生8,802人を対象にして、全学必修科目

<sup>(1)</sup>本学では学生が4月の時点で当該年度に受講する科目を登録する。合格科目とはこれらの科目を受講し、その成績が100点満点中60点以上の場合であり、不合格科目は60点に満たなかった科目をいう。放棄科目とは登録をしたものの、受講しなかったか、あるいは試験（あるいはそれと同機能を有する評価方法）を受けなかった科目である。

<sup>(2)</sup>大江，水谷（2001）参照。

<sup>(3)</sup>大江，辻，山崎，白井，後藤，岩谷，櫻井，水谷（2002）参照。

4科目<sup>(4)</sup>の成績を学科・専攻別，入学類型別に分析した<sup>(5)</sup>。

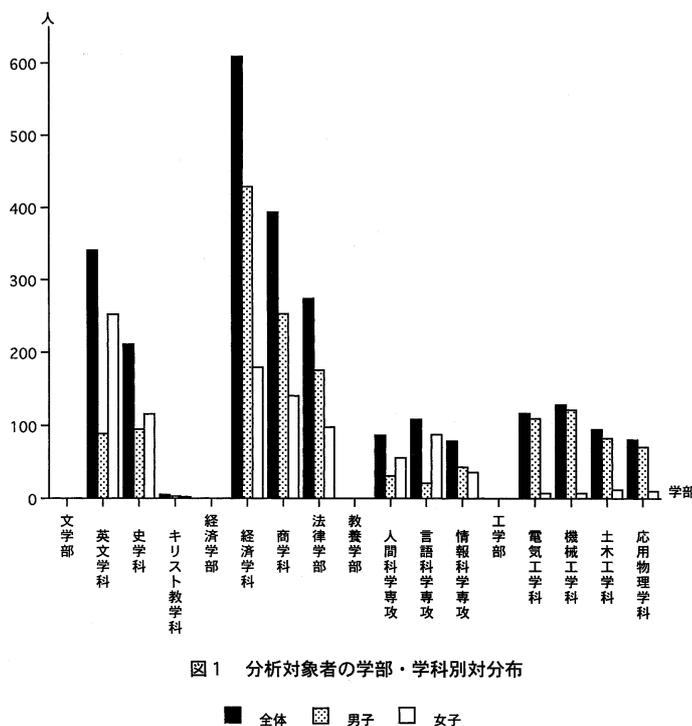
今回の報告では，これまでの分析を踏まえ，2000年度より実施されたいわゆるAO入試による入学生の成績を中心に分析を行う。なお，上記の3つの報告と同様に，本報告でも退学者や留年者等は分析の対象とはなっていない。これについては原田（2005），片瀬（2005）が取り上げている。

(2)方法

①分析対象とする学生

今回の報告における分析対象とする学生は2000（平成12）年度に入学し，かつ2003（平成15）年度に卒業した文学部，経済学部，法学部，工学部，教養学部の全学生である。なお教養学部は1学科3専攻制であった<sup>(6)</sup>が，以下においては専攻を「学科」として扱っている。

【図1】は学部13学科の卒業学生数を男女別にあらわしたものである。これらの学生総数は2,532人（男子1,526人，女子1,006人）であった。学科別にみると，もっとも多いのが経済学科（609人），もっとも少ないのが基督教学科（5人）である。



<sup>(4)</sup>全学必修科目は全学部の学生が共通に履修しなければならない必修科目であり，キリスト教学2科目，英語2科目である。ただし対象年度においては英文学科は別の科目になっているので，分析においては除外してある。

<sup>(5)</sup>大江（2003）参照

<sup>(6)</sup>教養学部は学部改組により，2007年度より1学部4学科制に移行する。また本学のいくつかの学科・専攻では学科・専攻名称が変更されているが，本報告では分析対象学生の入学年度の名称を用いている。

学生総数を13学科で除した場合、1学科の単純平均学生数は約195人である。これをこえる学科は経済学科(609人)、法律学科(274人)、英文学科(341人)、商学科(394人)、および史学科(211人)の5学科である。他の8学科はこれを下まわる。すなわち土木工学科(95人)、電気工学科(117人)、機械工学科(129人)、応用物理学(81人)、人間科学専攻(87人)、言語科学専攻(109人)、情報科学専攻(79人)、基督教学科(5人)である。

また13学科のうち女子が男子よりも多いのは英文学科、史学科、人間科学専攻、言語科学専攻、および基督教学科の5学科であった。

## ②入学類型

分析対象となった学生の主要な入学類型は多様であるとともに、学科固有の類型もある。これらのうち主要なものは学力による入学試験(以下、「入学試験」と略)、推薦入試、アドミッションズ・オフィス方式による入試(以下、「AO入試」とする)、本学と同一法人経営の2つの高校からの入学であるが、この他に編入学、二部社会人特別入試などがある。分析にあたっては、以下の13カテゴリーを用いている。

なお個々の対象学生の入学類型の特定にあたっては本学入試センター保管の資料を用いた。

### A.入学試験

前期入学試験3カテゴリー；正規合格、一次補欠合格(以下、「前期一次補欠」とする)、B方式<sup>7)</sup>。

後期入学試験1カテゴリー；以下、「後期」とする。

B.AO入試1カテゴリー；1999年度に第1回目の試験が実施され、2000年度入学、2003年度に卒業生を出している。

C.推薦入学4カテゴリー；学業推薦、スポーツ推薦、キリスト者推薦、資格取得による推薦(以下「資格取得」とする)。

D.同一法人2カテゴリー；A高校、B高校。

E.特別入試1カテゴリー；二部社会人特別入学試験(以下、「二部特別入試」とする)。

F.編入学1カテゴリー

以上の入学類型13カテゴリーのうち、二部特別入試は英文学科と経済学部2学科の3学科に、また資格取得は商学科に固有の入学類型であり、他の11カテゴリーは原則として全学科共通である。またA高校は男子高校であり、したがってこのカテゴリーに該当する女子対象者はいない。以下においてはカテゴリーを「入学類型」あるいは単に「類型」と表記する。

<sup>7)</sup>前期入試では3科目受験による得点が入学合否判定の基礎データとなるが、B方式では受験した3科目のうち、得点が上位2科目の総合点で合否判定が行われる。

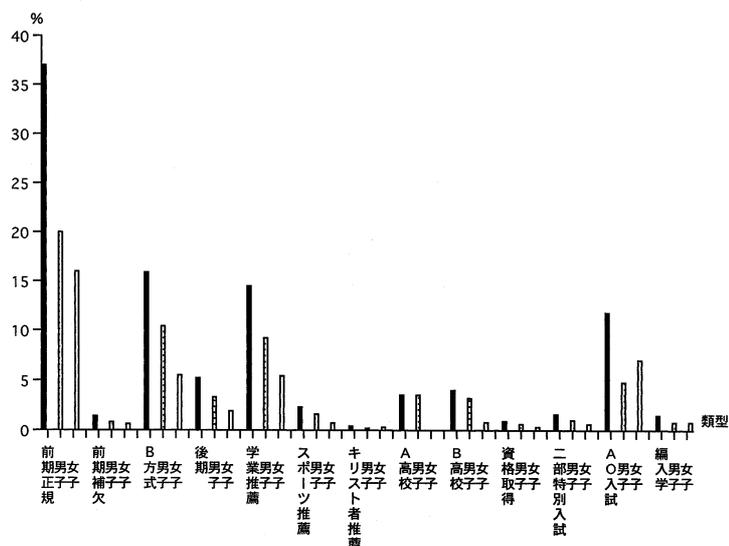


図2 全対象者の入学類型別学生比率

■ 全体   ▨ 男子   □ 女子

対象者全体に占める男子の割合は約6割（60.3%）、女子は4割（39.7%）であった。【図2】は、これら13入学類型の入学類型が全対象者に占める割合を男女全体，男子全体における男子割合，女子全体における女子割合として整理したものである。

これによると，対象者男女全体においてもっとも多いのが前期正規（37.0%），これに次いで多いのがB方式（15.9%），学業推薦（14.5%），AO入試（11.8%）である。これら4類型はいずれも10%以上の割合を占めており，これらの総計は全体の約8割（79.2%）に達する。これらに次いで多いのが後期（5.2%）である。上記5類型以外は全て5%未満である。そのうちB高校（4.0%），A高校（3.5%），スポーツ推薦（2.3%），二部特別入試（1.6%），編入学（1.5%），および前期一次補欠（1.4%）の6類型は1～5%台にある。資格取得（0.95%），キリスト者推薦（0.4%）の2カテゴリーはさらに少なく1%未満である。

また前期正規，前期補欠，B方式，および後期など，いわゆる受験科目の成績によって入学の可否判定がなされる入学は全体の約6割（59.5%）である。

男子全体を100とした場合，男子13類型のうち前期正規（34.7%），B方式（17.3%），学業推薦（15.2%）の3類型で全体の約7割（67.2%）に達する。従って他の10の入学類型の割合は総体的に小さくなるが，その中でもAO入試（8.0%），A高校（5.8%），B高校（5.4%），および後期（5.4%）は5～10%台にあり，これら4類型が全体に占める割合は24.6%程度を占めている。スポーツ推薦（2.7%），二部特別入試（1.7%），前期補欠（1.3%），編入学（1.3%），資格取得（0.9%），キリスト者推薦（0.3%）は3%未満である。

女子12類型においては男子とやや異なる分布を示し，前期正規（40.4%），AO入試（17.6%），B方

式 (13.7%)、学業推薦 (13.5%) が上位 4 入学となっている。後期は 4.8% であり、これら 5 類型で女子全体の 90% になる。他は 2% 未満であり、B 高校 (1.9%)、編入学 (1.9%)、スポーツ推薦 (1.7%)、前期補欠 (1.6%)、二部特別入試 (1.5%)、資格取得 (0.8%)、およびキリスト者推薦 (0.7%) の順となる。

今回の報告における対象者に限っているなら、女子では男子にくらべると前期正規、AO 入試の入学が多く、B 方式の割合が低い、ということができよう。

なお入試類型には全学科に共通するものと特定の学科に片寄っているものがあり、対象者全体に占める割合が小さくとも、特定の学科において大きな割合を占めているものもあることに注意されたい。

以下においては学科単位で入学類型と学業成績との関係を取り上げ、ここから 2003 年度に第 1 回目の卒業生をみた AO 入試類型の特徴を検討していく。

入学類型は多様であるとともに、対象者全体に占める割合にも偏差が大きい。そのために入学類型の成績はその類型の割合も考慮して検討される必要がある。そこで本報告ではこの両者の関係をとらえるために、上掲の分析を参考にして、入試類型の割合とその類型の成績を以下の基準に従って分類することにする。

- ①各入学類型はその割合に応じて、大群 (25.0%以上)、中群 (10~24%)、小群 (5~9%)、および僅少群 (~4%) の 4 群に分類する、
- ②学業成績は各学科の平均点を基準として平均 (平均点から ±1 点未満の範囲)、平均以上 (学科平均点よりも 1 点以上高いもの)、および平均以下 (学科平均よりも 1 点以上低いもの) の 3 群に分類する。

分析にあたっての数値処理は小数点第 2 位で四捨五入し、小数点第 1 位で表示している。また入試類型に属する学生が 2 名未満の場合は分析の対象としてはいないことを付記しておく。

### 3. 文学部

本報告の分析対象となる文学部卒業生総数は 557 人 (男子 187 人、女子 370 人) であり、分析対象者 2,532 人の 22.0% である。文学部における男女割合は男子が 33.6%、女子 66.4% であり、男女比率はほぼ 1 : 2 になっている。

文学部における英文学科対象者の占める割合は 61.2%、史学科は 37.9% であり、基督教学科は 0.9% である。さらにこれを男女別にみると、英文学科の男子は文学部全体の 16.0%、女子は 45.2% である。史学科ではそれぞれ 17.1%、20.8% であり、基督教学科では同様に 0.5%、0.4% である。

### 3-1 英文学科

英文学科全体の341人における男子は89人、女子252人であり、女子が学科全体の74%を占めており、男子は26%である。

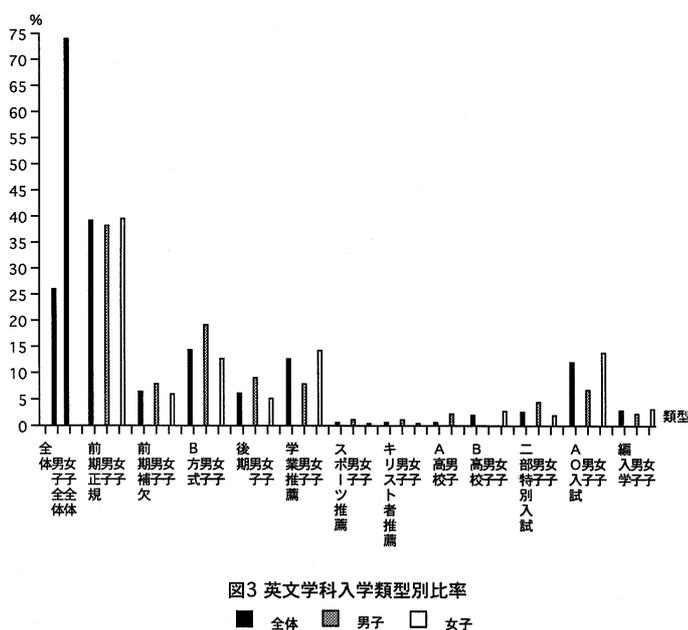
#### (1)入学類型の分布

【図3】は英文学科の入学類型の分布を男女全体、男子全体における男子割合、女子全体における女子割合として整理したものである。

男女全体としてみた場合、前期正規がもっとも多く39.2%であり、大群となる。これに次ぐのがB方式(14.3%)、学業推薦(12.6%)、AO入試(12.0%)であり、この3類型が中群である。前期補欠が6.4%、後期が6.1%であり小群に属する。編入学2.9%、二部特別入試2.6%、B高校2.0%、スポーツ推薦、キリスト者推薦、A高校の3類型それぞれは0.3%であり僅少群を成している。

男子を母数として男子11類型の割合をみると、前期正規(38.25%)は大群に、B方式(19.1%)は中群に属する。後期(9.0%)、前期補欠(7.9%)、学業推薦(7.9%)、およびAO入試(6.7%)の4類型は小群を、そして二部特別入試、A高校、編入学、スポーツ推薦、およびキリスト者推薦の5類型は5%に満たず、僅少群を構成している。

同様に女子全体における女子11類型の割合では、男子と同様に前期正規が39.5%であり大群になる。学業推薦(14.2%)、AO入試(13.8%)、およびB方式(12.6%)の3類型は中群であり、前期補欠(5.9%)と後期(5.1%)の2類型は小群である。編入学、B高校、二部特別入試、スポーツ推薦、およびキリスト者推薦は3%以下の僅少群となる。



## (2)入学類型別学業成績

学科全体の平均点は77.9であり、男子の平均点は76.4、女子は78.4であり、女子は男子よりも2ポイント高い。【図4】は分析対象とした入学類型の学業成績平均点からの差を、男女全体、および男女別に整理したものである。

男女全体の分析対象は9類型であり、このうち後期と二部特別入試が平均点以上、前期正規、前期補欠、編入学、学業推薦、およびAO入試の6類型は平均群、B高校とB方式の2類型は平均以下であった。最高の二部特別入試と最低のB高校との差は6.1ポイントである。

男子7類型で平均以上となったのは後期と二部特別入試の2類型であり、学業推薦が平均群となる。B方式、前期補欠、AO入試、前期正規の4類型は平均以下である。女子の9類型で平均以上となったのは二部特別入試、前期補欠、後期、編入学、前期正規の5類型であり、B方式、学業推薦、およびAO入試の3類型は平均群となる。平均以下となったのはB高校のみである。

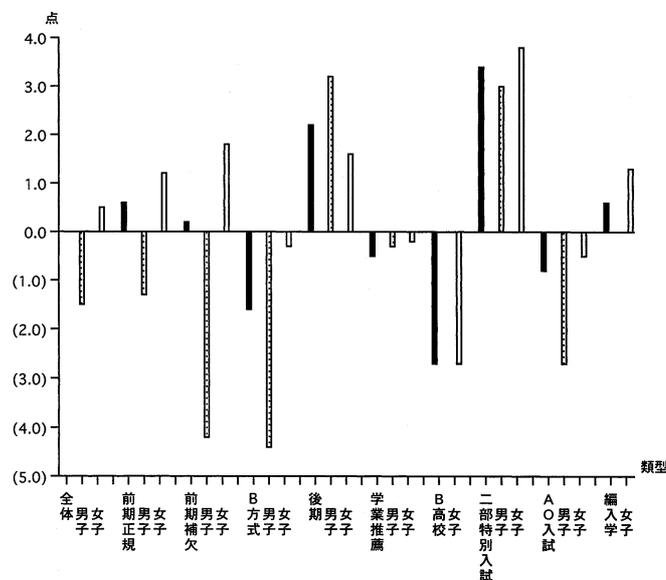


図4 英文学科における入学類型別成績

■ 全体 □ 男子 □ 女子

## 3-2 史学科

史学科全体の211人における男子は95人、女子116人であり、女子が学科全体の55.0%を占めており、男子は45.0%である。

## (1)入学類型の分布

【図5】は史学科の10の入学類型の分布を男女全体、男子全体における男子割合、女子全体における女子割合として整理したものである。

男女全体としてみた場合、前期正規がもっとも多く31.3%であり大群となる。AO入試 (23.2%)、

学業推薦 (14.2%), B方式 (10.9%) の3類型は中群であり, 後期 (7.6%), B高校 (5.7%) の2類型が小群に属する。A高校 (3.8%), スポーツ推薦 (1.9%), 編入学 (0.9%), キリスト者推薦 (0.5%) の4類型は僅少群となる。

男子8類型が男子全体に占める割合では前期正規 (31.6%) がもっとも大きく大群, B方式 (14.7%), AO入試 (11.6%), 後期 (10.5%), および学業推薦 (10.5%) の4類型が中群となる。B高校 (9.5%) とA高校 (8.4%) は小群, スポーツ推薦 (3.2%) は僅少群である。

女子の9類型ではAO入試 (32.8%) と前期正規 (31.0%) の2類型が大群, 学業推薦 (17.2%) が中群である。B方式 (7.8%) と後期 (5.2%) の2類型が小群, そしてB高校, 編入学, スポーツ推薦,

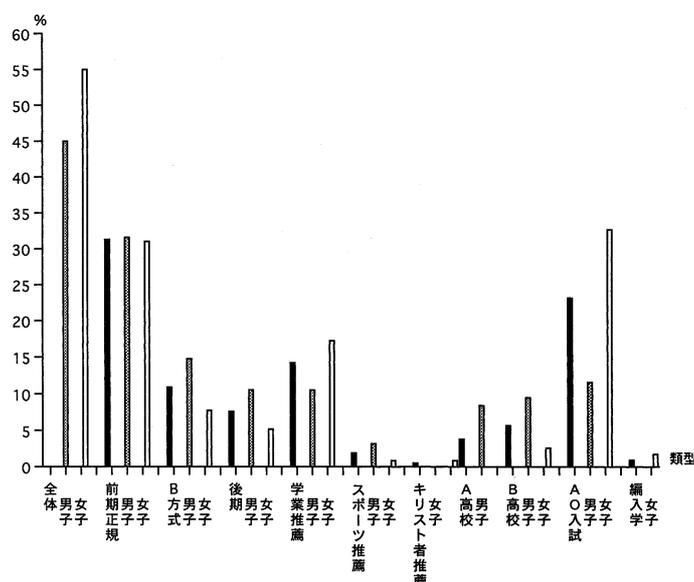


図5 史学科入学類型別比率

■ 全体 □ 男子 □ 女子

キリスト者推薦の4類型は僅少群となる。

## (2)入学類型別学業成績

史学科全体の学業成績平均点は74.3であった。男子全体では70.4, 女子のそれは77.4であり, 女子は男子を7ポイント上回っている。【図6】は各類型の学業成績平均点と全体の平均点の差を男女全体, 男女別に表示したものである。

分析対象とする8類型を男女全体としてみると, 学科平均を上回っているのはAO入試と前期正規の2類型, 学業推薦は平均群である。後期, B方式, A高校, B高校, スポーツ推薦の5類型は平均以下である。最高のAO入試と最低のスポーツ推薦の差は14.2ポイントに達する。

次に女子をみると, ここで分析対象とした6類型のうち平均以下の類型はなく, すべて平均以上となっている。逆に男子の8カテゴリーの全てにわたって平均以下となっている。

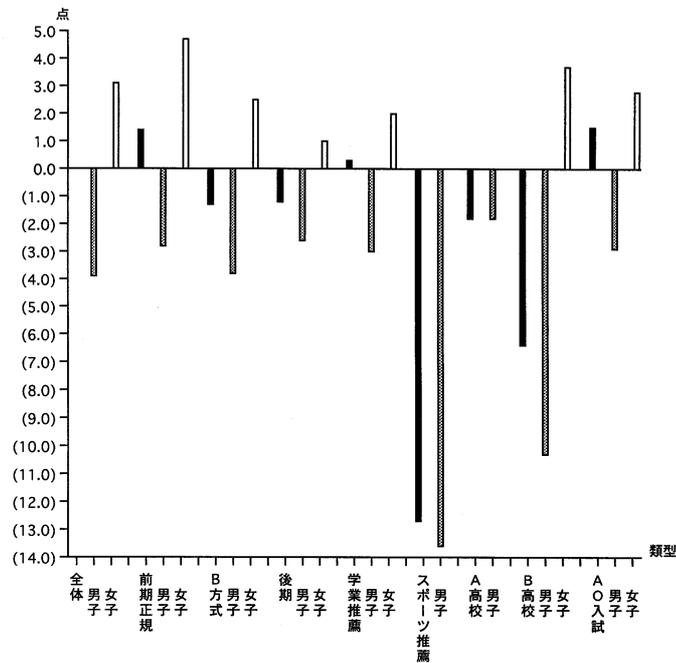


図6 史学科における入学類型別成績

■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

### 3-3 基督教学科

卒業生5人の入学類型はキリスト者推薦が男女各2人，編入学が男子1人である。

学科全体の学業成績平均点は73.7，男女全体のキリスト者推薦の平均点は72.0であり，平均以下となっている。

## 4. 経済学部

本報告の分析対象となる経済学部卒業生総数は1,003人（男子682人，女子321人）であり，分析対象者2,532人の39.6%，ほぼ4割である。経済学部における男女割合は男子が68.0%，女子32.0%であり，男女比率はおよそ7：3になっている。

経済学部における経済学科対象者の占める割合は60.7%，商学科は39.3%である。さらにこれを男女別にみると，経済学科の男子は経済学部全体の42.8%，女子は17.9%である。商学科ではそれぞれ25.2%，14.1%である。経済学部全体としてみると男子の割合が高いのは2学科の男子が多いことによる。

### 4-1 経済学科

経済学科全体の609人における男子は429人，女子180人であり，男子が学科全体の約7割（70.4%）を占めており，女子は29.6%である。

(1)入学類型の分布

【図7】は経済学科の入学類型の分布を男女全体、男子全体における男子割合、女子全体における女子割合として整理したものである。

男女全体としてみた11類型の場合、前期正規が38.9%で大群となる。これに次ぐのがB方式(19.9%)、学業推薦(11.7%)で2類型は中群、AO入試(7.4%)後期(5.6%)の2類型は小群である。B高校、スポーツ推薦、二部特別入試、A高校、編入学、前期補欠の6類型が僅少群を構成する。

男子の11類型のうち前期正規(38.2%)は大群に、B方式(20.5%)と学業推薦(10.5%)の2類型は中群に属する。AO入試(6.1%)、後期(5.4%)、およびB高校(5.1%)の3類型は小群を、スポーツ推薦、A高校、二部特別入試、編入学、前期補欠の5類型は僅少群を構成している。

女子9類型のうちでも前期正規(40.6%)は大群、とB方式(18.3%)、学業推薦(14.4%)、AO入試(10.6%)は中群に属し、後期(6.1%)は小群である。スポーツ推薦、二部特別入試、編入学、およびB高校は僅少群である。

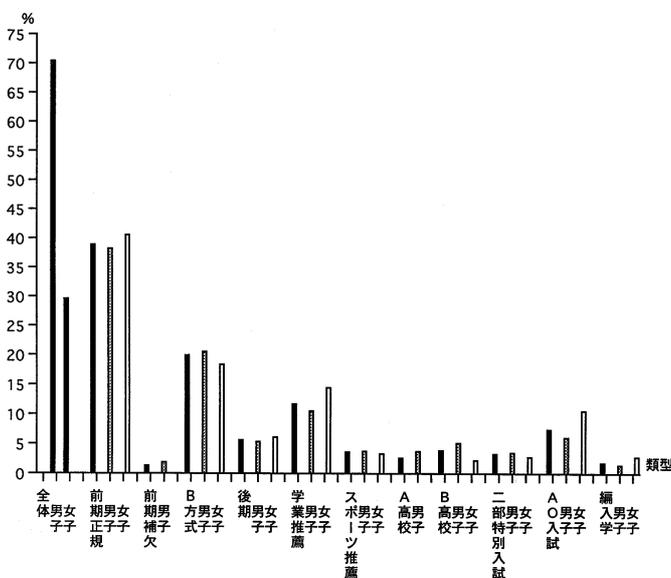


図7 経済学科入学類型別比率

■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

(2)入学類型別学業成績

経済学科全体の学業成績平均点は81.3であった。男子全体では80.8、女子のそれは82.3であり、女子は男子を1.5ポイント上回っている。【図8】は各類型の学業成績平均点と全体の平均点の差を男女全体、男女別に表示したものである。

男女全体としてみると11類型のうち編入学と二部特別入試は平均以上、後期、学業推薦、AO入試、前期補欠、前期正規、B方式の6類型は平均群となる。A高校、スポーツ推薦、B高の3類型は平均

以下となった。最高の編入学と最低のA高校の差は4.0ポイントである。

男子の11類型で平均以上は編入学と二部特別入試の2類型，A高校，スポーツ推薦，B高校，B方式の4類型は平均以下である。AO入試，学業推薦，前期補欠，後期，前期正規の5類型は平均群の位置にある。

次に女子の8類型では後期，前期正規，二部特別入試，編入学，学業推薦の5類型は平均以上，B方式とAO入試は平均群であり，平均以下はスポーツ推薦のみである。

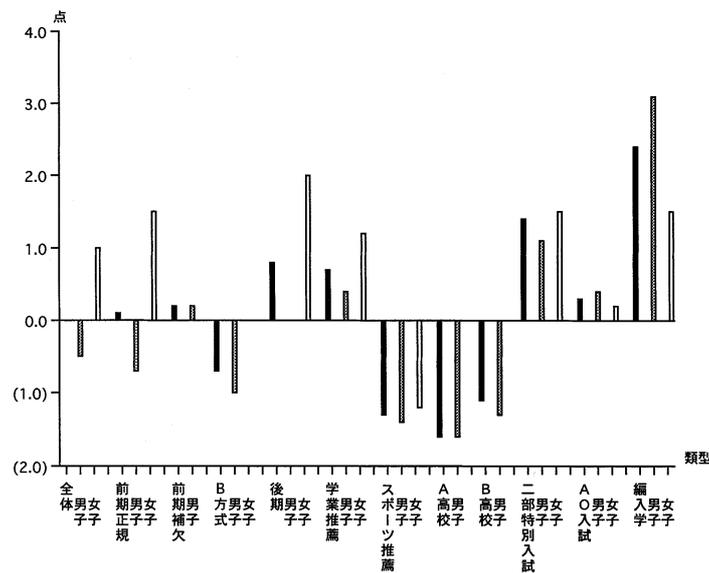


図8 経済学科における入学類型別成績

■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

## 4-2 商学科

商学科全体の394人における男子は253人，女子141人であり，男子が学科全体の64.2%を占めており，女子は35.8%である。

### (1)入学類型の分布

【図9】は学科の入学類型の分布を男女全体，男子全体における男子割合，女子全体における女子割合として整理したものである。

男女全体としてみた12類型の場合，前期正規がもっとも多く42.4%となり大群を構成する。これに次ぐのがB方式（18.3%）であり中群となる。学業推薦（8.9%），AO入試（8.6%），前期補欠（8.0%），資格取得（5.6%）の4類型は小群であり，二部特別入試，スポーツ推薦，B高校，後期，A高校，編入学は僅少群をなしている。

男子の12類型では前期正規（41.1%）が大群を，B方式（19.0%）は中群となる。学業推薦（9.5%），AO入試（6.7%），資格取得（5.5%）の3類型は小群を，またA高校，B高校，二部特別入試，後期，

スポーツ推薦，編入学，前期正規の7類型は僅少群をなしている。

女子11類型では前期正規（44.7%）が大群，B方式（17.0%）とA O入試（12.1%）が中群となり，学業推薦（7.8%）と資格取得（5.7%）の2類型は小群であり，スポーツ推薦，二部特別入試，後期，編入学，前期補欠，およびB高校の6類型は僅少群である。

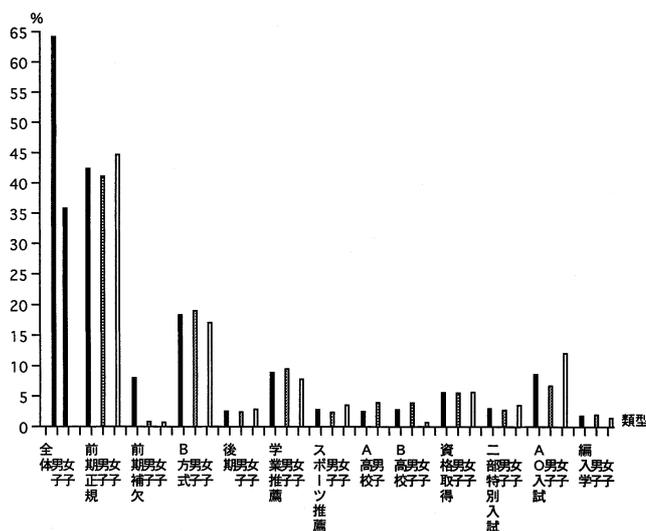


図9 商学科入学類型別比率

■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

## (2)入学類型別学業成績

商学科全体の学業成績平均点は77.2であった。男子全体では76.2，女子のそれは78.9であり，女子は男子を2.7ポイント上回っている。【図 10】は各類型の学業成績平均点と全体の平均点の差を男女全体，男女別に表示したものである。

男女全体の12類型についてみると，二部特別入試，編入学，資格取得，後期，A O入試の5類型は平均以上，学業推薦，B高校，前期正規，前期補欠の4類型は平均群となる。これらに対してB方式，スポーツ推薦，およびA高校の3類型は平均以下である。最も高い二部特別入試と最も低いA高校との差は7.4ポイントである。

男子11類型のうち平均以上となっているのは二部特別入試，後期，編入学，および資格取得の4類型である。A O入試，学業推薦，前期正規，およびB高校の4類型は平均群となる。スポーツ推薦，B方式，A高校の3類型は平均以下である。

女子の分析対象となる8類型では，スポーツ推薦とB方式の2類型は平均群となるが，前期正規，後期，学業推薦，資格取得，二部特別入試，A O入試の6類型は全て平均以上である。

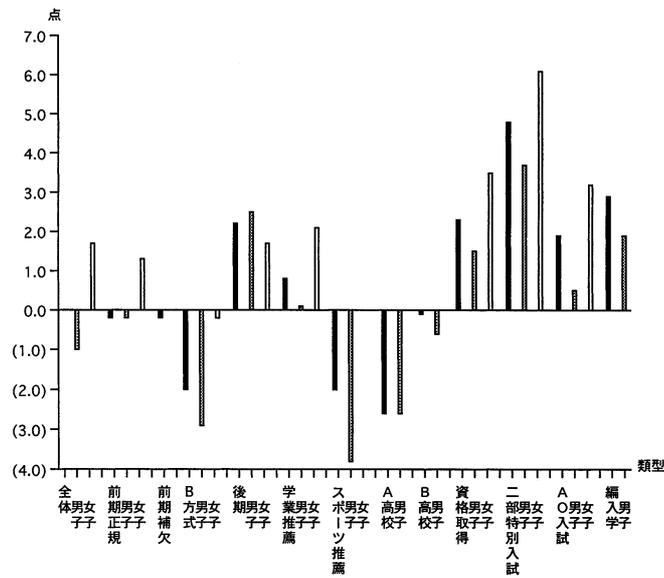


図10 商学科における入学類型別成績

■ 全体 □ 男子 □ 女子

### 5. 法学部法律学科

法学部は法律学科1学科制であり、学科全体の対象者は274人である。男子は176人、女子98人であり、男子が学科全体の64.2%を、女子は35.8%占める。

#### (1) 入学類型の分布

【図11】は法律学科の入学類型の分布を学科全体の対象者を母数として男女全体、および男女全体における男女別に整理したものである。

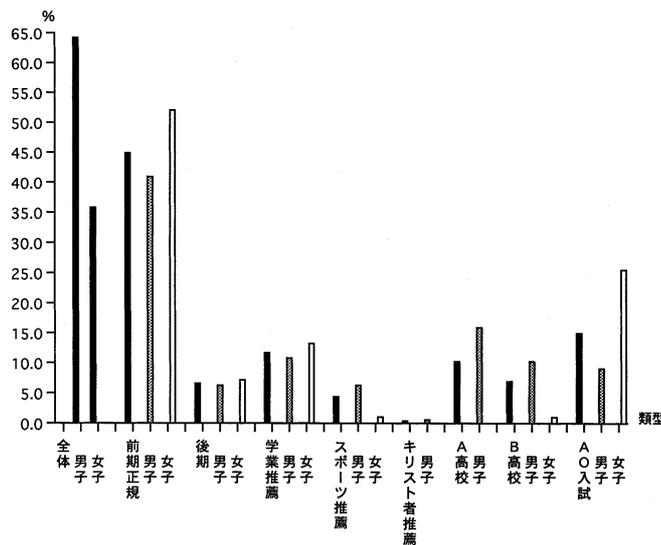


図11 法律学科学類型別比率

■ 全体 □ 男子 □ 女子

男女全体としてみた8類型の場合、前期正規がもっとも多く44.9%であり大群となる。これに次ぐのがAO入試(15.0%)、学業推薦(11.7%)、A高校(10.2%)であり、これらの3類型は中群に属する。小群にはB高校(6.9%)と後期(6.6%)が入り、スポーツ推薦(4.4%)とキリスト者推薦(0.4%)は僅少群である。

次に男子を母数として男子8類型の分布をみると、大群は前期正規(40.9%)の1類型のみであり、中群にはA高校(15.9%)、学業推薦(10.8%)、およびB高校(10.2%)の3類型が含まれている。AO入試(9.1%)、後期(6.2%)、およびスポーツ推薦(6.2%)の3類型は小群、キリスト者推薦は0.9%で僅少群に属する。

女子の6類型では前期正規(52.0%)とAO入試(25.5%)の2類型は大群に、学業推薦(13.3%)は中群に属し、後期(7.1%)は小群である。スポーツ推薦とB高校の2類型はともに1.0%であり僅少群となる。

(2)入学類型別学業成績

学科全体の平均点は69.6、男子66.8、女子73.9であり、女子が男子よりも7.1ポイント高い【図12】。

学科全体では平均以上となっているのはAO入試のみであり、前期正規、学業推薦、B高校は平均、スポーツ推薦、A高校、および後期の3類型は平均以下である。なおもっとも成績の高いAO入試ともっとも低いスポーツ推薦の差は17.6ポイントである。

男子ではAO入試が平均以上、B高校が平均群であり、スポーツ推薦、A高校、後期、前期正規、学業推薦の5類型は平均以下である。これに対し女子のAO入試、前期正規、後期、および学業推薦の4類型はいずれも平均以上である。

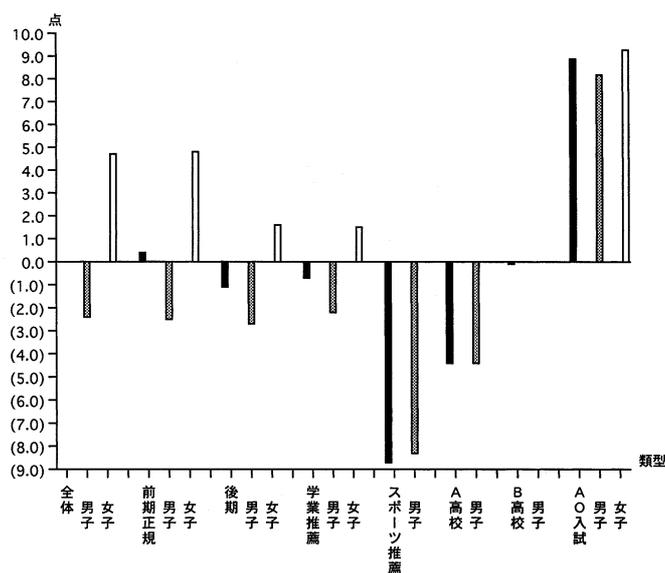


図12 法律学科における入学類型別成績

■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

## 6. 教養学部

教養学部は1学部1学科3専攻制であり、学科全体の対象者数は275人、男子95人、女子180人である。男子は全体の34.5%、女子は65.5%となる。人間科学専攻は男女全体で87人、学科全体の31.6%、人間科学男子が学科全体で占める割合は11.3%（31人）、人間科学女子は20.4%（56人）である。言語科学専攻全体は109人、学科全体では39.6%、男子7.6%（21人）、女子32.0%（88人）である。同様に情報科学専攻全体では79人（28.7%）、男子43人（15.6%）、女子36人（13.1%）である。

### 6-1 人間科学専攻

人間科学専攻では専攻全体の35.6%を男子が、64.4%を女子が占める。

#### (1) 入学類型の分布

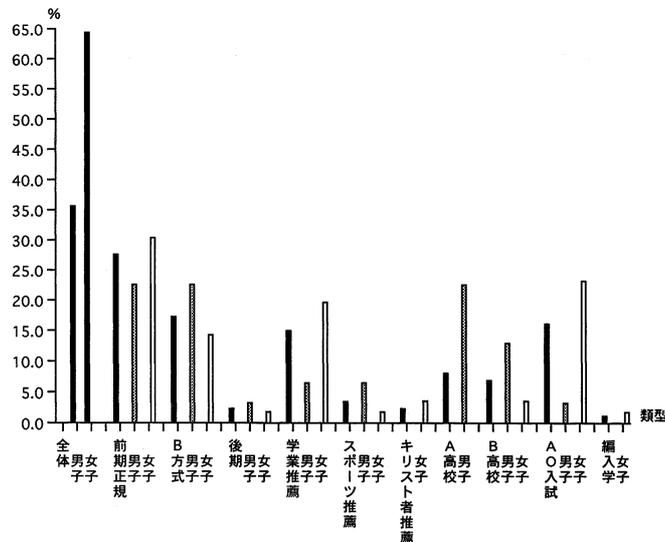


図13 人間科学専攻入学類型別比率

■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

【図13】は各入学類型の分布を専攻全体，男子全体における男子割合，女子全体における女子割合として整理したものである。

男女全体としては専攻の10類型のうち，前期正規（27.6%）が大群に属する。B方式（17.2%），A O入試（16.1%），および学業推薦（14.9%）の3類型は中群に属し，A高校（8.0%）とB高校（6.9%）の2類型は小群に属する。スポーツ推薦（3.4%），後期（2.3%），キリスト者推薦（2.3%），および編入学（1.1%）の4類型は僅少群である。

男子全体における男子8類型の分布では大群に属する類型はなく，前期正規（22.6%），B方式（22.6%），A高校（22.6%），およびB高校（12.9%）が中群に属する。学業推薦とスポーツ推薦はそれぞれが6.5%であり小群，後期とA O入試はともに3.2%と僅少群に属する。

女子全体における女子9類型では前期正規（30.4%）が大群に，またA O入試（23.2%），学業推薦

(19.6%)，およびB方式(14.3%)はの3類型は中群に属する。残りのB高校(3.6%)，キリスト者推薦(3.6%)，後期(1.8%)，スポーツ推薦(1.8%)，および編入学(1.8%)の5類型は5%に満たず，僅少群となる。

(2)入学類型別学業成績

人間科学専攻全体の平均点は77.4，男子74.3，女子79.0であり，女子が男子よりも4.7ポイント高い【図14】。

専攻全体としてみると分析対象となる7類型中平均以上はAO入試の1類型のみであり，前期正規，学業推薦，B方式，およびB高校の4類型は平均，スポーツ推薦とA高校は平均以下となっている。

女子4類型では前期正規とAO入試が平均以上である。学業推薦，B方式の2類型は平均であった。

男子4類型では平均以上の類型はなく，B高校とB方式が平均，前期正規とA高校は平均以下である。

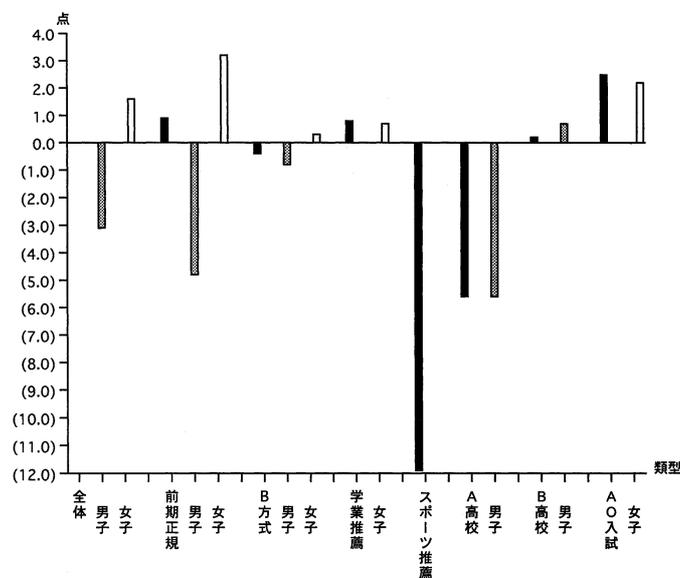


図14 人間科学における入学類型別成績

■ 全体 □ 男子 □ 女子

## 6-2 言語科学専攻

言語科学専攻全体の109人のうち女子が80.7%，男子が19.3%であり，女子の割合が大きい。

(1)入学類型の分布

【図15】は各入学類型の分布を専攻全体，男子全体における男子割合，女子全体における女子割合として整理したものである。

専攻全体としてみると9類型中，前期正規が半数以上の52.3%を占め，大群を形成する。これに次いで多いのがB方式(22.9%)とAO入試(10.1%)であり中群に属する。学業推薦は7.3%で小群，他の5類型はいずれも2%に満たず，僅少群となる。

女子8類型では前期正規が女子全体の半数以上の52.3%であり、大群となる。B方式(23.9%)とAO入試(11.4%)の間にはかなりの差があるが、ともに中群である。後期、スポーツ推薦、キリスト者推薦、B高校の4類型は3%に達しておらず、僅少群を構成している。男子7類型では、前期正規(52.3%)が大群となり、B方式(19.0%)が中群、そして学業推薦(9.5%)、スポーツ推薦(4.8%)、A高校(4.8%)、B高校(4.8%)、およびAO入試(4.8%)の5類型は小群である。しかし男子ではそもそも母数が小さいために実人数はごく少ない類型が多い。

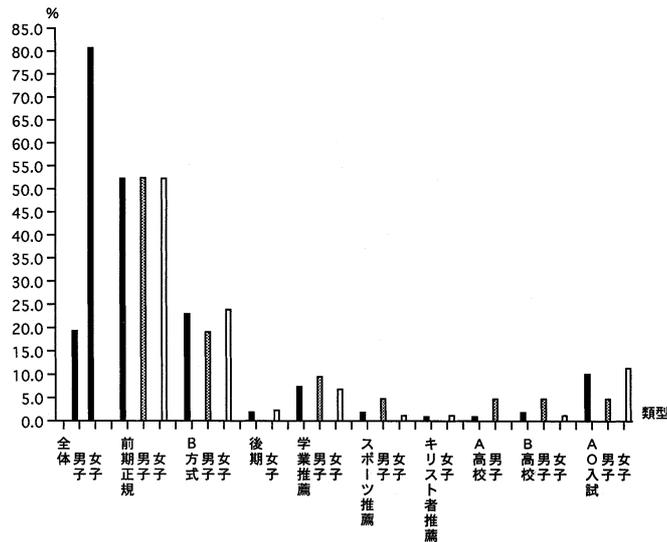


表15 言語科学専攻類型別比率

■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

(2)入学類型別学業成績

言語科学専攻全体の平均点は75.7, 男子75.1, 女子75.8であり、女子が男子よりも0.7ポイント高い

【図16】。

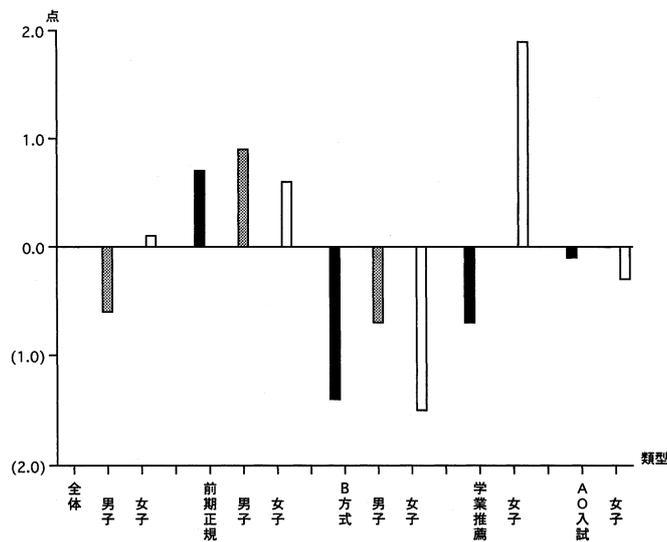


図16 言語科学における入学類型別成績

■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

専攻全体としてみると分析対象となる4類型中平均以上の類型はない。すなわち、前期正規、学業推薦、およびAO入試の3類型は平均、B方式は平均以下となっている。

女子4類型では学業推薦が平均以上、B方式は平均以下、そしてAO入試が平均である。男子の前期正規とB方式はともに平均である。

## 6-2 情報科学専攻

情報科学専攻全体の79人のうち女子が45.6%，男子が54.4%であり、男女の差は大きくない。

### (1)入学類型の分布

【図17】は各入学類型の分布を専攻全体、男子全体における男子割合、女子全体における女子割合として整理したものである。

専攻全体としてみると9類型中、前期正規が27.8%を占め大群に、次いでAO入試(17.7%)とB方式(16.5%)の2類型が中群に属する。後期(8.9%)、A高校(7.6%)、学業推薦(6.3%)、B高校(6.3%)、および編入学(6.3%)の5類型は小群に、スポーツ推薦は2.5%で僅少群となる。

男子を母数とした時の男子9類型の割合は、前期正規が25.6%と大群に、そしてB方式(18.6%)、A高校(14.0%)、および後期(11.6%)の3類型が中群に属する。編入学(9.3%)、B高校(7.0%)、AO入試(7.0%)の3類型は小群を、また学業推薦(4.7%)、スポーツ推薦(2.3%)は僅少群を構成する。女子は8類型であり、前期正規とAO入試がともに30.6%と女子の中では大群を構成し、B方式(13.9%)が中群を構成する。また学業推薦(8.3%)、後期(5.6%)、およびB高校(5.6%)は小群に、スポーツ推薦と編入学は僅少群になる。なお、情報科学専攻においても母数そのものが小さいために、割合が大きくとも実数は小さいことがある。

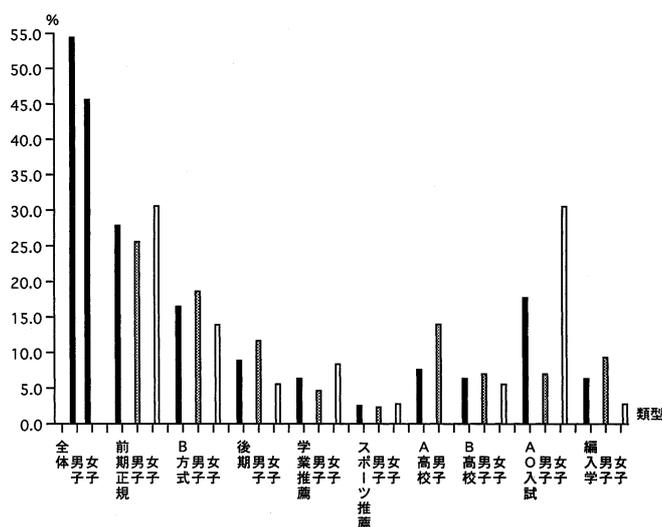


図17 情報科学専攻入学類型別比率

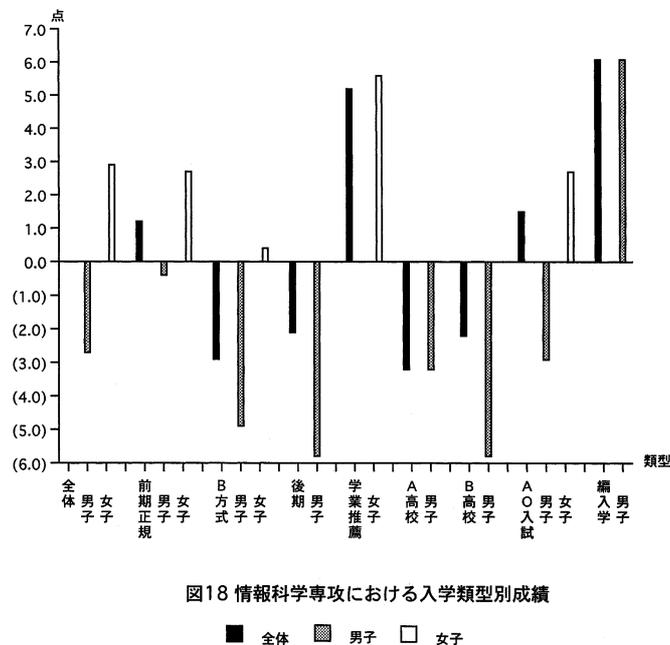
■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

(2)入学類型別学業成績

情報科学専攻全体の平均点は75.5，男子72.8，女子78.4であり，女子が男子よりも5.6ポイント高い【図18】。

専攻全体としてみると分析対象となる8類型中平均以上の類型は編入学，学業推薦，A O入試，および前期正規の4類型である。これに対してA高校，B方式，B高校，および後期の4類型は平均以下であった。最高の編入学と最低のA高校の差は9.3ポイントであった。

男子で分析対象となるのは7類型であり，平均以上の群に入るのは編入学のみであり，前期正規が平均である。B高校，後期，B方式，A O入試，およびA高校の5類型は平均以下である。女子4類型の場合，B方式が平均の他は学業推薦，A O入試，前期正規ともに平均以上となっている。



7. 工学部

工学部は1学部4学科制であり，学科全体の対象者数は422人，男子386人，女子36人である。男子は全体の91.5%，女子は8.5%であり，圧倒的に男子が多い学部となっている。機械工学科は男女全体で129人，学部全体の30.6%，機械工学科学男子は122人，女子は7人であり，学部全体に占める割合はそれぞれ28.9%，1.7%である。電気工学科は男女全体で117人，男子110人，女子7人であり，これらが学部全体に占める割合はそれぞれ27.7%，26.1%，1.7%である。土木工学科全体は95人，男子83人，女子12人，それぞれ22.5%，19.7%，2.8%である。同様に応用物理学科はそれぞれ81人，71人，10人，割合は19.2%，16.8%，2.4%である。このように工学部では全体に女子が僅少であるが，それはそれぞれの学科で女子が少ないことによっている。

## 7-1 機械工学科

機械工学科男女全体のうち男子は94.6%，女子は5.4%である。

### (1)入学類型の分布

【図19】は各入学類型の分布を専攻全体，男子全体における男子割合，女子全体における女子割合として整理したものである。

これによると男女全体の8類型では学業推薦が30.2%，前期正規が27.1%となり，この2類型が大群を構成し，これに次いでB方式（19.4%）とA O入試（10.9%）が中群を構成する。後期（4.7%），A高校（3.9%），B高校（3.1%），および前期補欠（0.8%）の4類型は5%に満たず，僅少群となる。

男子を母数とする男子8類型の割合は学業推薦が30.2%であり大群となる。前期正規はほぼ大群の基準に近いものの24.8%で中群，またB方式（17.8%）も中群である。A O入試（9.3%）は小群，後期（4.7%），A高校（3.9%），B高校（3.1%），および前期補欠（0.8%）は僅少群となる。女子は絶対数が少ないので参考にとどまるが，前期正規（42.9%），B方式（28.6%），およびA O入試（28.6%）の3類型は全て大群になる。

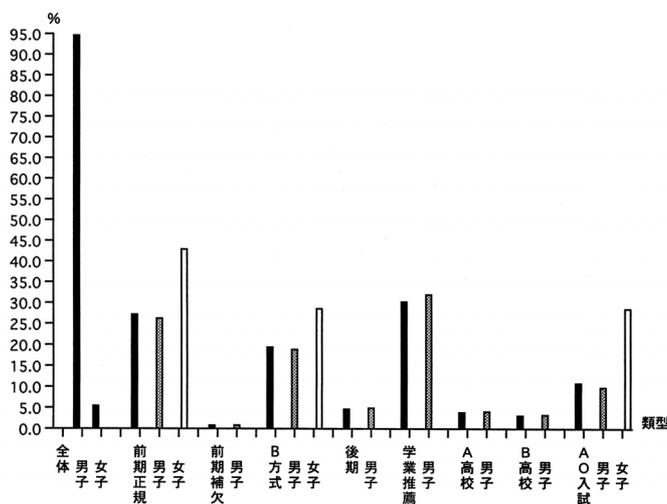


図19 機械工学科入学類型別比率

■ 全体 □ 男子 □ 女子

### (2)入学類型別学業成績

学科全体の成績平均点は69.8，男子は69.4である。女子は男子よりも8ポイント高い77.4であった【図20】。

男女全体として分析対象となるのは7類型であり，このうちB高校と前期正規が平均以上，A O入試，学業推薦，A高校は平均の位置にある。後期とB方式は平均以下であった。最高のB高校と最低の後期との差は6.5ポイントであった。

男子7類型のうち平均以上はB高校と前期正規の2類型，AO入試，学業推薦，A高校の3類型は平均であり，後期とB方式は平均以下であった。女子は例数が少ないので参考程度にしかならないが，前期正規は学科平均点をはるかに上回っており，平均以上となる。

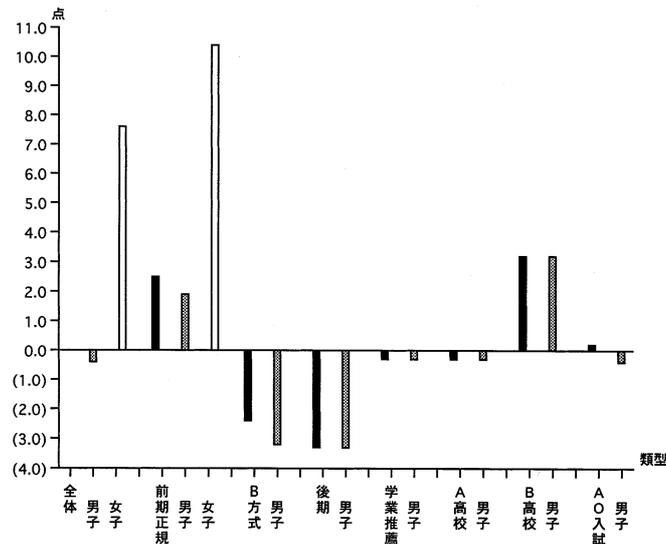


図20 機械工学科における入学類型別成績

■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

## 7-2 電気工学科

電気工学科男女全体のうち男子は94.0%，女子は6.0%である。

### (1) 入学類型の分布

【図21】は各入学類型の分布を専攻全体，男子全体における男子割合，女子全体における女子割合として整理したものである。

男女全体としてみると7類型のうち学業推薦が34.2%であり，大群に属する。前期正規（24.8%），B方式（16.2%），およびAO入試（12.0%）の3類型は中群に，後期とB高校はともに6.0%で小群に属する。A高校（0.9%）は僅少群である。

男子全体における男子7類型では学業推薦（32.5%）は大群，前期正規（23.9%）とB方式（15.4%）は中群を構成し，AO入試（9.4%），後期（6.0%），B高校（6.0%）は小群に属する。A高校は僅少群となる。女子は学科全体で6%しかならず，したがって女子全体における女子の4類型の割合はきわめて少数の人数にもとづいている。その点を踏まえていうと，AO入試は42.9%（3人）で大群である。学業推薦（28.6%）も大群，前期正規とB方式は各1人，割合としては14.3%と中群に入る。

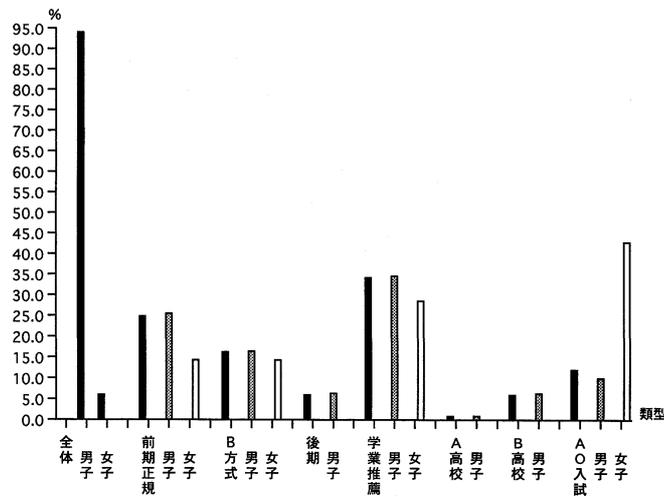


図21 電気工学科入学類型別比率  
 ■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

(2)入学類型別学業成績

学科全体の成績平均点は69.0，男子は68.8である。女子は男子よりも5.1ポイント高い73.9であった。【図22】は分析対象とした男女全体の6類型，男子の6類型，および女子の1類型の成績平均点を整理したものである。

男女全体としてみると，AO入試，後期，B高校は平均以上，前期正規，学業推薦は平均であり，B方式は平均以下であった。最高のAO入試と最低のB方式の差は10.1ポイントである。

男子で平均以上となったのはAO入試，後期，B高校の3類型，平均は前期正規と学業推薦であり，B方式は平均以下である。女子で分析対象となったAO入試は平均以上である。

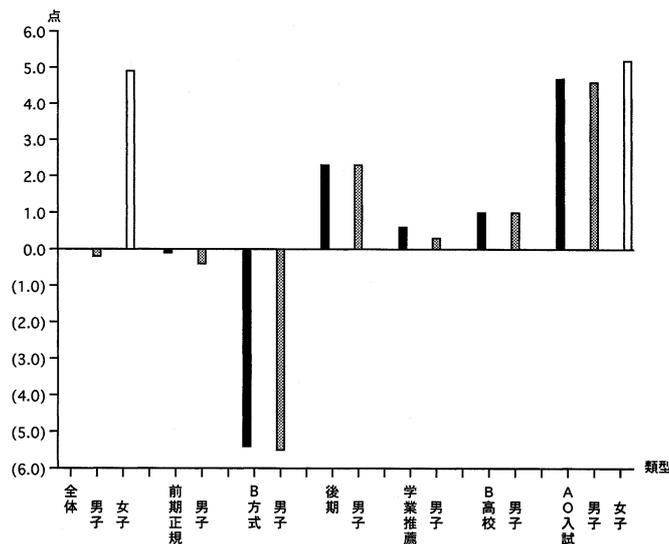


図22 電気工学科における入学類型別成績  
 ■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

### 7-3 土木工学科

土木工学科男女全体のうち男子は87.4%，女子は12.6%である。

#### (1)入学類型の分布

【図23】は各入学類型の分布を専攻全体，男子全体における男子割合，女子全体における女子割合として整理したものである。

男女全体の9類型のうち，学業推薦が32.6%で大群に属する。B方式（21.1%），前期正規（18.9%），およびA O入試（12.6%）の3類型は中群に，後期（5.3%）は小群に属する。B高校（4.2%），前期補欠（2.1%），A高校（2.1%），および編入学（1.1%）の4類型は僅少群である。

男子を母数とした場合の男子9類型では，学業推薦（31.3%）が大群，B方式（21.7%），前期正規（19.3%），およびA O入試（12.0%）の3類型が中群となる。後期（4.8%），B高校（4.8%），前期補欠（2.4%），A高校（2.4%），および編入学（1.2%）は僅少群に属する。

女子は全体として12人にすぎないが，5類型のうち学業推薦が41.7%で大群，前期正規，B方式，およびA O入試の3類型はともに16.7%で中群に属する。後期は1人，女子の中では8.3%であり小群になる。

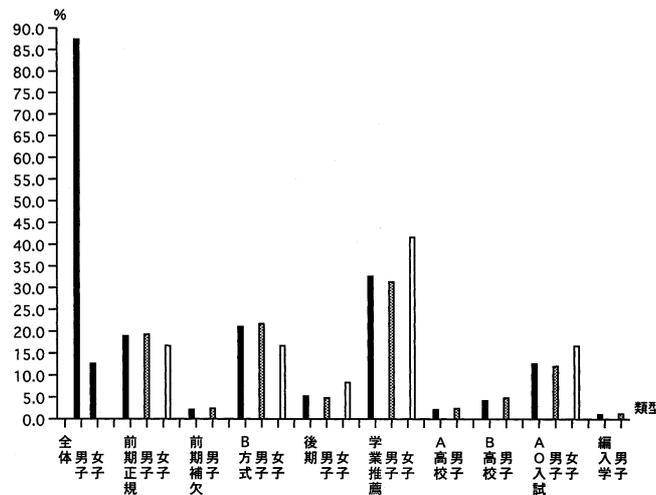


図23 土木工学科入学類型別比率

■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

#### (2)入学類型別学業成績

学科全体の成績平均点は70.9，男子は70.3である。女子は男子よりも5.0ポイント高い75.3であった。

【図24】は分析対象とした男女全体の6類型，男子の6類型，および女子の1類型の成績平均点を整理したものである。

男女全体のうち平均以上となるのは学業推薦，平均は前期正規である。残りのB方式，後期，B高校，およびA O入試の4類型は平均以下である。最高の学業推薦と最低のB方式の差は5.9ポイントで

ある。

男子6類型では学業推薦が平均以上、前期正規は平均であり、後期、B方式、B高校、およびAO入試の4類型は平均以下である。女子の分析対象となるのは学業推薦のみであり、平均以上である。

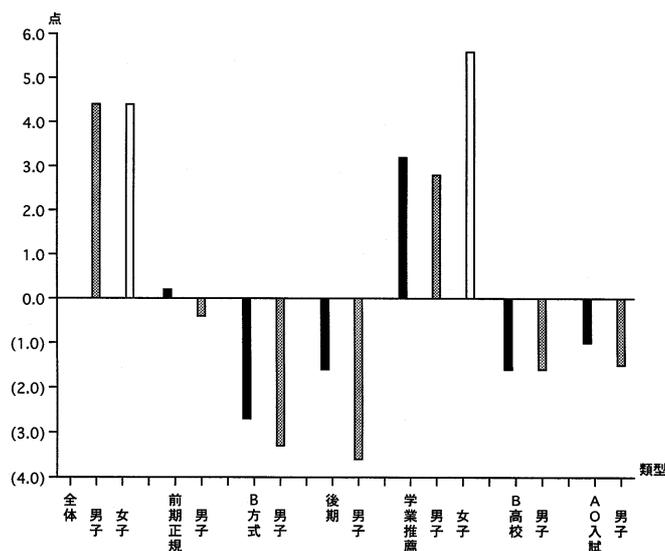


図24 土木工学科における入学類型別成績

■ 全体   ▨ 男子   □ 女子

#### 7-4 応用物理学科

応用物理学科男女全体のうち男子は87.7%，女子は12.3%である。

##### (1) 入学類型の分布

【図25】は各入学類型の分布を専攻全体，男子全体における男子割合，女子全体における女子割合として整理したものである。

男女全体の7類型のうち，大群に属するのは前期正規（29.6%）と学業推薦（25.9%）の2類型であり，中群に属するのはB方式（24.7%）とAO入試（12.3%）の2類型である。後期（3.7%），A高校（2.5%），編入学（1.2%）の3類型は僅少群となる。

男子を母数とする男子7類型では前期正規（29.6%），B方式（26.8%），学業推薦（25.4%）の3類型が大群に，AO入試（11.3%）は中群，後期（2.8%），A高校（2.8%），および編入学（1.4%）の3類型は僅少群である。

女子は総数で10人であるが，前期正規と学業推薦は各3人，女子の中では30.0%となり大群，AO入試（20.0%），B方式（10.0%），および後期（10.0%）は僅少群となる。

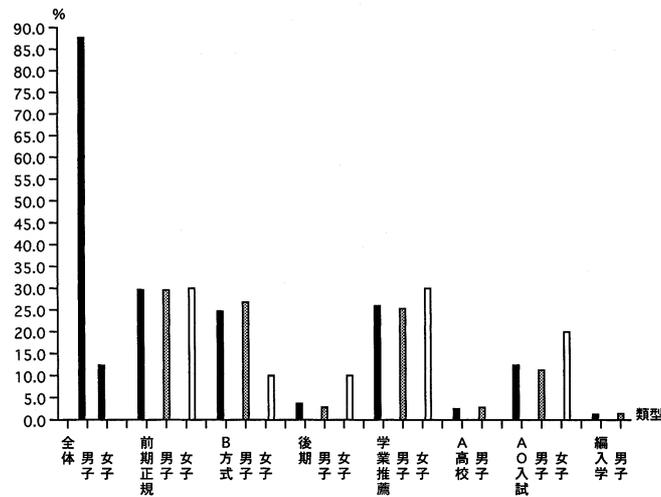


図25 応用物理学科入学類型別比率

■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

(2)入学類型別学業成績

学科全体の成績平均点は68.7%，男子は68.5%である。女子は男子よりも1.8ポイント高い70.3であった。【図26】は分析対象とした男女全体の5類型，男子の4類型，および女子の2類型の成績平均点を整理したものである。

男女全体では，後期とB方式が平均以上，前期正規と学業推薦が平均であり，A O入試は平均以下である。男子ではB方式と前期正規が平均，A O入試と学業推薦は平均以下であり，女子では学業推薦が平均以上，前期正規は平均以下であった。

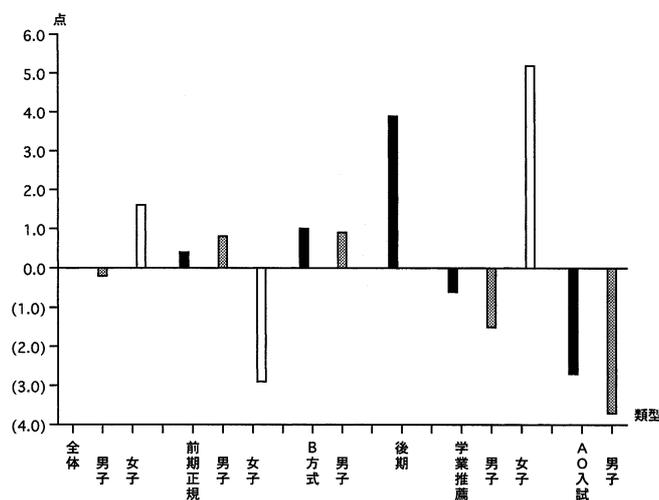


図26 応用物理学科における入学類型別成績

■ 全体    ▨ 男子    □ 女子

## 8. 検討

	大群 (25%~)	中群 (10~24%)	小群 (5~9%)	僅少群 (~4%)
平均以上	史学・前期正規 情報・前期正規 機械・前期正規 土木・学業推薦	史学・AO入試 法律・AO入試 人間・AO入試 情報・AO入試 電気・AO入試 応物・B方式	英文・後期 商・資格取得 商・AO入試 情報・編入学 情報・学業推薦 電気・後期 電気・B高校	英文・二部特別 応物・後期 経済・編入学 経済・二部特別 商・編入学 商・後期 機械・B高校
平均群	英文・前期正規 経済・前期正規 商・前期正規 法律・前期正規 人間・前期正規 言語・前期正規 機械・学業推薦 電気・学業推薦 応物・前期正規 応物・学業推薦	英文・学業推薦 英文・AO入試 史学・学業推薦 経済・B方式 法律・学業推薦 人間・学業推薦 人間・B方式 言語・AO入試 機械・AO入試 電気・前期正規 土木・前期正規 法律・学業推薦	英文・前期補欠 経済・後期 経済・AO入試 商・学業推薦 商・前期補欠 法律・B高校 人間・B高校 言語・学業推薦	英文・編入学 経済・前期補欠 商・B高校 機械・A高校
平均以下		英文・B方式 史学・B方式 商・B方式 法律・A高校 言語・B方式 情報・B方式 機械・B方式 電気・B方式 土木・B方式 土木・AO入試 応物・AO入試	史学・後期 史学・B高校 法律・後期 人間・A高校 情報・A高校 情報・B高校 情報・後期 土木・後期	英文・B高校 商・A高校 史学・A高校 史学・スポーツ 経済・A高校 経済・B高校 経済・スポーツ 商・スポーツ 法律・スポーツ 人間・スポーツ 機械・後期 土木・B高校

図27 入学類型比率と成績の関係

以下において本学の入学類型におけるAO入試の特徴をみていく。【図27】はこれまでに行ってきた分析結果を各類型が学科において占める割合の程度と成績のランクとの関係で整理したものである。ただし基督教学科は対象者が少ないので除外している。したがってここで扱うのは4学部12学科/専攻である。

まず大群には14の学科・専攻/類型が入っており、これらの類型は前期正規と学業推薦である。14のうちの10までが成績平均群となっているが、これは学科に占める割合が大きいことにより、それ自体が学科の成績の平均を構築することによるものといえよう。その意味では史学科、情報科学専攻、機械工学科の前期正規と土木工学科の学業推薦が平均以上となっていることは注目に値する。

中群もまた学科の平均点に作用する傾向があるといえる。しかしAO入試が中群の中でも平均以上となっている学科が多く、逆にB方式が平均以下になる割合が大きい。その中で応用物理学科のB方式が平均以上となっていること、土木工学科と応用物理学科のAO入試が平均以下となっていることは、際立った特徴となっている。

小群と僅少群には平均以上となる類型が少なくなく、入学類型の個性が反映されやすい群となっている。一方スポーツ推薦、A高校はとくに平均以下になりやすく、B高校と後期にもその傾向がみられる。しかし工学部の機械工学科と電気工学科のB高校、電気工学科、英文学科、応用物理学科、および商学科の後期は平均以上となっており、同一類型であっても学科によって偏差があることを忘れてはなるまい。

本報告の課題であるAO入試の入学類型の成績は総体的によいといえる。しかし今回の対象者はAO入試のいわば第1期生である。今後さらにデータを積み重ねていく必要があるであろう。

文 献

- 原田善教 2005 経済学科学生の入試類型別成績・調査報告 東北学院大学教育研究所報告集, 5, 35-42.
- 片瀬一男 2005 退学者動向・調査報告(1)教養学部の場合 意欲があつて大学を去る者, 意欲を失つてやめる者— 2つの不幸な退学理由へのプール代数アプローチ 東北学院大学教育研究所報告集, 5, 43-69.
- 大江篤志, 水谷修 2001 成績分析からみた大学教育の研究(1) —課題の検討に向けて— 東北学院大学教育研究所報告集, 1, 11-34.
- 大江篤志, 辻秀人, 山崎和郎, 白井培嗣, 後藤隆夫, 岩谷信, 櫻井研三, 水谷修 2002 成績分析からみた大学教育の研究(2) —入学類型と学業成績の関係 東北学院大学教育研究所報告集—, 2, 1-51.
- 大江篤志 2003 成績分析からみた大学教育の研究(3) —入学類型と全学共通科目の学業成績との関係を中心に— 東北学院大学教育研究所報告集, 3, 1-57.